

## 〔翻刻〕『狂歌初心抄』

小 林 勇

本書は言う迄もなく天明狂歌壇の一方の雄唐衣橘洲が初心者向けに著した狂歌の入門書である。本書の内容に就いては浜田義一郎氏が「狂歌といえども「本歌の本道によらざれば、落首の泥塗に落」ちるという見解から、『八雲御抄』『愚問賢注』『細川幽斎聞書』などの歌学書・歌論書を引いて和歌について語り、転じて狂歌の場合を述べるという形をとる。……しかし結局天明狂歌否定の立場なので、自作も僅か五首、ついで由縁斎（油煙斎）貞柳と朱楽菅江が三首で、例歌の大多数は本歌である。誠実ではあるが融通の利かない人柄を表わした著書で、初心者への作法指導という目的を達し得たとは思われない」と述べておられ、この御見解は大体に於て首肯すべきものであるが、しかし狂歌のような、いわば和歌との相対的關係に於て定義され、しかも本来遊戯的で理論とは無縁の文芸が、何らかの理論を欲した場合、歌学書、歌論書に大きく拠り掛かるのは已むを得ぬ所で、近世の狂歌論の殆ど全てに共通する現象である。又「初心者への作法指導」という点に関しては、凡そ短詩型文学に就いて実作の添削を伴わぬ理論のみの指導というものが考え難いのは今日の短歌や俳句の場合とも一般であらう。そう考えれば如何に委曲を尽くしてみた所で所詮は五十歩百歩であるとも言える。

一体天明狂歌の特徴の一つはそうした階梯を必要としない知識人による遊びである所にあると思われる。然るに狂

歌の盛行はそれだけの素養のない一般大衆の大量参加を促し、生産される狂歌の質は著しく低下していった。本書のような入門書の意識で書かれる書物の出現はそうした現象に対応したものであったが、逆に言えばこうした書物が書かれること自体本来の天明狂歌の在り方からの大きなズレを感じさせる。本書の立場も天明狂歌の否定ではなく、時代の必然的な動きへの対応と見るべきではないだろうか。

そうした歌学書、歌論書による理論武装や、又寛政二年という、天明狂歌が既に大きく変質した時点で著された書物である点を割り引いても、本書は橘洲の狂歌観をまとめた形で伝える唯一の資料としての価値を失わないであろう。天明狂歌が余りに赤良にのみ偏って論じられ過ぎる弊は旧稿に於ても少し触れた所であるが、今日でもその傾向は大きく変わってはいないと思われる。事ある毎に赤良と対比的に取り上げられる橘洲の狂歌観を伝える本書がより広く読まれる必要があると考える。猶『国書総目録』及び『古典籍総合目録』によれば、本書の伝本は十四本が著録されており（刊本に限った）、原本の閲覧が困難な書物では必ずしもないが、筆者も加わって現在計画されている『江戸狂歌本集成』の収録書目からももれているのでここに翻刻することにした。

翻刻の底本には架蔵の後刷本を用いたが、初刷と考えられる京都大学文学部頼原文庫蔵本と比較すると、次のような違いが見られる。先ず底本では本文の前にある酒月米人の文章は、初刷本では跋文として本文の後に置かれており、これが本来の形態である。それ以外にも初刷本ではこの跋文の後に「耕書堂蔵板狂歌書物目録」一丁を付すといった違いがあり、表紙も淡黄色地に白で花模様が浮き出しになっている。次に簡単に底本の書誌を記しておく。

表紙 黄色布目表紙。十八・二×十二・八糎。

題簽 左肩。单杵。「狂謔初心抄 完」。十三・七×三・一糎。

構成 自序、一丁半。白紙、半丁。酒月米人序、二丁。目録、二丁。本文、六十一丁。計、六十七丁。

目録題 狂歌初心抄目録。

内題 狂歌初心抄。

柱記 なし。

丁付 各丁裏ノド。序に「初心序一」「初心序二」。米人序にはなし。目録に「初心序三」「初心序四」。本文に「初心抄壹」「初心抄二」「初心抄廿九」「初心三十」「初心六十」「初心六十一止」。

匡郭 なし。

字高 約十四・五糎。

刊記 本文末に「江戸本町筋通油町南側／蔦屋重三郎板」。

蔵書印 「鶯亭金升蔵書」「長井蔵書印」「昌安」<sup>3)</sup>。

以下翻刻に際しては、仮名遣い、清濁等は全て底本のままとした。漢字は常用漢字表にあるものは原則として現在通行の字体を用い、句読点は原文に全くこれを欠くので新たに補った。又二行割書の部分は括弧で括って一行で示した。丁移りは原本の表記を以て示したが、数字の上の「初心(抄)」の文字は省略し、丁付のない丁は「丁付なし」とした。猶虫損等で読み難い個所は前記京大本を以て校訂した。

(1) 『日本古典文学大辞典』。

(2) 『国語国文』第五十五卷第九号、拙稿「天明風浅見」。

(3) 金升は本名長井総太郎。又所用の蔵書印に「長井昌安」印あり(日本書誌学大系44『蔵書印提要』)。全て同人の印であろう。

牛渡馬勃敗鼓の皮まで貯て用をまつは良医也。牛飼の詞、馬士の歌、糸瓜の皮までたくはへて用をなす、狂歌師也。されと本歌の本道によらされは落首の泥塗に落て、風雅の道に出かたし。いまや狂詠のさかんなる、花を売翁、水を商ふおのこ、久かたの（序一オ）あめ売、あらかねの土大根売まで街にうたふ世となり侍れと、狂歌とのみおもひて、そのさましら壁のしらぬ家もおほかめれは、これか道しるへたつものをと耕書堂かもとめいなみかたくて、いなすはしりのおほこ口にたよりある和歌の抄物に、狂歌のおもむき、乞食（序一ウ）ふくろのそこはかとなくかいつけて、八のまきとなりぬ。これを狂歌初心抄と名つけてあたへ侍り。こや雪の道しる老馬ならぬ、かたのおきな老婆心なるへし。

寛政二のとし二月

唐衣橘洲しるす（序二オ）

良医の眼には、藥ならさる艸もなく、また毒ならさるもなしとかや。いまやひなふり歌盛りに行れて、ひな人のひたすらにひなひたるすさひと斗にもあらず、やことなき姫きみも雪月花帖にはめてさせたまひ、いや高き大みや人も万さい才蔵らかおかしみをはみそなはすへくなんありける。かゝれは此みちの友かきら、千里の山の（丁付なしオ）木の数よりもしげく、五反はたけのけしつぶよりも多し。されと狂歌に似て落首なるものあり。秀句に似て地口なるものあり。それかきはをわきまへす、ひたよみによりいつる程に、たま／＼えたる玉の言の葉も、ひかりを世にしられすして、下和か恨をいたくものも又すくなからず。是をさたしきはめんもの、音にもきくらん、呉竹の（丁付なしウ）よつや新宿まくさの中に、あやめ咲てふ江戸わらんべのいけ口も、たゞまくをしきから衣橘洲先生、その器にあたり。しかはあれと、大人生質宰予か癖ありて、短き冬の日も暁を覚す。かくても猶世務にさへられ、あるは浴室に時をうつして、随従の門人すらきゝ得ん事のわつらはしければ、まして遠き境をや。此事を歎の余り、耕書堂のあるしつたのからまる（丁付なしオ）しきりに求て、我党のよすがとするの初心抄を梓行す。是いはゆる兵家の三略に

ひとしく、此書によるもの、独詠しひとり番ひて、その程くをわいたためしる事、あたかも良医に伴て薬園に入か如くならんと、酒月の米人かいふ。(丁付なしウ)

狂歌初心抄目録

- 一 狂哥の大意<sup>キ</sup>
- 二 理屈をさるべき事<sup>リクツ</sup>
- 三 体用対の事<sup>テイタイ</sup>
- 四 達吟の事<sup>タク</sup>
- 五 遅吟の事<sup>チギン</sup>
- 六 心を先とし詞を先とする事
- 七 対語の事<sup>タイゴ</sup>
- 八 上下緩急の事(序三オ)<sup>クハンキウ</sup>
- 九 風体の事
- 十 皮肉骨の事<sup>ヒニクコツ</sup>
- 十一 題とりの事<sup>ダイ</sup>
- 十二 題よみ方心得の事
- 十三 傍題の事<sup>ボウダイ</sup>
- 十四 片題の事<sup>ヘン</sup>
- 十五 落題の事<sup>ラク</sup>

- 十六 題に相応不相応の事<sup>サウフウフサウフウ</sup>
- 十七 題に心を深く入へき事(序三ウ)<sup>フカ</sup>
- 十八 結題の事<sup>ムスビタイ</sup>
- 十九 題をおもはせてよむ事
- 二十 恋のうたの事
- 廿一 述懐、旧哀傷の歌の事<sup>シユクハイクハイクウアイシャウウタ</sup>
- 廿二 贈答の事<sup>ソウトウ</sup>
- 廿三 禁忌をさるべき事<sup>キンキ</sup>
- 廿四 歌の病の事<sup>ヤマヒ</sup>
- 廿五 字余の事<sup>ジアマリ</sup>
- 廿六 歌の程拍子の事(序四オ)<sup>ホドヒヤウシ</sup>
- 廿七 秀句の事<sup>シウク</sup>
- 廿八 隔句の事<sup>ヘクテ</sup>
- 廿九 歌合の歌の事
- 三十 歌に必きるゝ所ある事
- 卅一 名所の哥の事

以上(序四ウ)

狂歌初心抄

大意

狂歌よまんには、先ッ大意を失ふべからず。大意とは、風流とおかしみなり。もと狂哥も和哥の一体にして、万葉集にもむなきをとると川へなかるななどの哥あり。其外世々の撰集にも、狂哥めく歌あまたあり。俳諧哥てふもの、其類ひなるへし。さるを狂哥はひとへにざれたるものと心得、又は曲節にかゝはりてあらぬえせ落首となる哥おほし。其一二をいはゝ、頃日ある人の哥に（壱オ）

うかれ女は色も情もきぬゝのゑりもとにつくあかつきのかね

挑灯て餅をつく夜のはつかしやねるとはすれとたゝぬ老か身

二首ともにたくみには見へ侍れと、はしめのは襟もとにつくなと心いやしく、後のはてうちんて餅、ともに俗中の俗なり。白楽天か詩を白俗とて于鱗が選にはもらしはへれと、故人も楽天か詩を俗にして俚ならずと賞美し、我國のむかしは楽天か詩をことに欽慕したまひしなり。俚は鄙俚とつゝきて、いやしとよむ也。狂哥はいかにも和哥によまぬ俗語もてつゞり侍れと、（壱ウ）楽天か俗にして俚ならずといふ所肝要なり。おかしみをよまんとて、戯場の道外がたのことくはあるましき也。おかしみある哥

西行法師

我だにもまだくひたらぬ水かゆの底にも見ゆる影法師哉

よみ人しらす

きぬゝの東しらみにかく恥は我ふる夜着のうらみ也けり

石田みとく

君か今宵落たれはこそ恋しぬる命を我はひろひぬるかな（二オ）

すこしもおかしみなきにも秀哥はあり。諸体をわけは狂哥にも、十体もその余もあるへし。

理屈をさるへき事

一 詩も痴情<sup>チゼウ</sup>を貴<sup>タツト</sup>ふとて、妓女<sup>ギヂョ</sup>などのいかにもかしこく見ゆる中に、おろかにあどけなき所<sup>トコロ</sup>あるが愛敬<sup>アヒケウ</sup>ありてらうたきことく、愚にあどなきか風流の主意なりとそ。

あし引の山のあなたにすむ人はまたでや秋の月を見るらん

山のあなたにすめばとて、いつも月のあるへきやうなし。さるを月待宵にいつも山より出る事のおそきにより、(二ウ)山のあなたはまた月見るらんとおもひやりたるところ、痴情<sup>チゼウ</sup>にておもしろし。

有明のつれなく見へし別よりあかつき斗うきものはなし

これも逢無<sup>アフナキ</sup>実恋<sup>ジツ</sup>の哥なるよし。本意<sup>ホイ</sup>なくわかれしつれなさに、心もなきあかつき程うきものはなしとよめる所、是も痴情なり。ことに此あり明の哥は古今<sup>コキン</sup>第一の哥と哥仙も沙汰したまひしなり。とかく理屈をはなれたるところならては秀逸<sup>シュイツ</sup>はなし。宋人<sup>ソウ</sup>の詩は理屈<sup>リクツ</sup>にて風流に遠しと詩話<sup>シワ</sup>にあり。(三オ)

雨のあしあれば夕立それならは昼間<sup>ヒルマ</sup>そぐはひる立にこそ

これ理屈なり。さりとて理のわからぬは哥にあらず。このさかひよく腹に味ふへし。

体用対の事

一 哥を一首よめるに、先体用対といふ事を思ふへし。

衣は体なり。

ほす きる たゝむ かさぬるは用なり。

鶯は体なり。

なく 梢<sup>コサエ</sup>にうつる やとる 木つたふは用なり。(三ウ)

舟は体なり。

こぐ かへる つなくは用なり。

対といふは、

衣は体

袖 袂 襟 裳は対なり。

舟は体

楫 帆 棹 苫は対なり。

ものことに此体用対をもて考へし。

#### 拘字の事(四オ)

一 かゝへ字なくてよむへからさる詞多し。つれなきといふ事をはけしきとよむ時は、嵐か山嵐なとかゝえあるへし。

荒るゝといふには、海か古郷か駒かなとあるへし。

花すゝきまねくといふには、風のあしらひあるへし。

そよといふには篠か芦などのかゝえあるへし。

すゝきにまねくとよむ時は、花すゝきとか尾花とかすへし。穂に出たるか手にも袖にも似たるゆへなるよし。

ひたふるといふには、田といふ事あるへし。

つかの間といふには、太刀か筆か鹿の角あるへし。(四ウ)

からきといふには辛の字なれとも、塩によせてかゝえたり。

そゞろといふことは、すゞろとも用ゆ。此時は芦荻薄篠などのかゝえあるへし。

一 六百番歌合に、春の駒を縄たつとよめる哥を、ふるきことはなれとも品なしと難ありしなり。故人名は立とい



ふ事にもちひてよめるゆへとぞ。

### 達吟の事

八雲御抄に、哥をよむ事は、いふかひなくまたしき程はきはめて大事なり。すこししりぬれはやすし。なを（五才）やうく悟入しぬれば、又大事になるといへり。かくのことく四五度もなりて静るといへり。是も人ことの事にはあらし。人の心によるへきにや。やすくよむよし、て、当坐の百首五十首、幾日に何百首をよみたるなといふ事、かへすくこのむへからず。かへつて哥のみち浅くなる事也。尤高名にあらず。百首なども余りにやすく人ことによむ事あるへからず。当座なとは一首二首、おほからんも三首にすくる事なかれ。おほくよみて尤詮なき事也云々。わきて狂哥は達吟（五才）ならねは下手と思はれんかと、人ことに達者たてをする故、目とまる哥少し。尤狂哥は時の興にあへる事もあなれば、其時は未練にても、はやきもむねとすべけれど、題とりなどは本哥よむにかはる事なし。人ことに狂哥の腸、詩歌腸とて別あるへき様なし。近き頃半井ト養など、すこふる小手のきゝたるにまかせ、席上にて人々のもとめをふさくとて、あらぬ事をおほくよめるも余儀なき事也。それかならはしとなりて、狂哥師とさへいへは達吟なるものと、人々のもとめよん所なく（六才）、其せめをふさがんと無下につたなき哥よみて恥を頭より、不達者ものといはるともよき哥の一首もよまんこそ、風流の詮もあるへけれ。先は十人か九人、鼻うごめきて達吟の自負する人に上手はすくなし。其さかひに入ぬれば、達者はいかやうにもよめるものなり。初心の程は努く達者を好へからず。

### 遅吟の事

初心のうちあまりに沈案も益なし。いかに案ずとも、初心の程は趣向も広からねは、余りに案しほれては退屈もいて来るなれば、すらくくとよみならふへし。それよりすこし（六才）功の入にしたかひ、よみとよみ案しと案する程のこと、みな人の糟糠のみにて、新しき作意も出ず。爰にて又しりぞく心出来るなり。其ときはさしみ哥とて、人に見

せす的<sup>マト</sup>なしにすらく<sup>マ</sup>と口にまかせてよむへし。其中よりのあたる哥も出来るもの也。

### 心を先とし詞を先とする事

愚問賢注に、哥は心を先とすへきか、詞を先とすへき歟、古来先達さまく申て侍り。八雲御抄をよむに、思ふへきこと六ツありとて、一、心を先とすへき事と侍るは、詞は(七才)後かと覚ゆほとに、一、詞を先とすへき事と侍るは、又心は次かと思ゆ。所詮前後あるへからさる事也。陸士衡<sup>リクシカウ</sup>か文賦<sup>フ</sup>に、恒<sup>ツネ</sup>に患<sup>ウレ</sup>ふ、意不<sup>イ</sup>称<sup>カナハ</sup>レ物<sup>モノ</sup>、文不<sup>ス</sup>速<sup>ヲヨホサ</sup>レ意<sup>イ</sup>、蓋非<sup>ゲタシラスシル</sup>知<sup>ラ</sup>レ之<sup>カタキ</sup>難<sup>ヨクスル</sup>一能<sup>カタキ</sup>レ之<sup>カタキ</sup>難<sup>ヨクスル</sup>なりといへり。哥またおなしかるへし。心に風情を得る事もかたく、風情を得て詞をなす事もかたき也。所詮人のいまたよまさる風情を、やすらかに艶<sup>エン</sup>なる詞にてつゝくへき也。しかあれは心ことはとにもえかたし。得がたくことつきたるうへをしるて案すれば、さすかに出来る事なり。かく案しても一首もよまんに(七ウ)こそ稽古とは申へきなれ。古迹<sup>コセキ</sup>と申聖教<sup>シヤウケウ</sup>に、初入<sup>ハシメイル</sup>こと実<sup>マコト</sup>に難<sup>カタ</sup>し。難<sup>カタキ</sup>に由て退<sup>シリンカイツレ</sup>は何の時成<sup>トキナラ</sup>んといへり。何事も金言<sup>キンゲン</sup>なるもの歟。狂哥又ひとし。しかしながら狂哥は心を先とするかたなるへくや。和歌にも京極黄門へある人、心のたらはぬと詞のたらはぬをいつれと伺ひ侍りしに、やむ事を得ずはことはのたらはぬはまだしもなり。心のたらしらは哥にあらずと仰ありしとぞ。とかく心をもとゝし、さていかにも詞をかさりよむへきにこそ。(八才)趣向<sup>シュカウ</sup>のみにて詞のふつゝかなるは、よき女の襟袍<sup>ランホウ</sup>のやれたるを着たらんかことし。いかにも相應の詞をもてはれ着とすへし。相應のことはとは、たとへは奴に錦をきせ、上臈<sup>ロウ</sup>に紺<sup>コン</sup>かんばんきせたらんはつきくしからず。いつれ貴賤相應の衣類にものすきあるへし。

### 対語<sup>タイ</sup>の事

幽斎聞書<sup>ユウサイキキ</sup>に、是は哥の上下かけ合の事也。只哥は問答<sup>モンタウ</sup>のことし。たとへは上句にていひ出したる事をは、(八ウ)下句にて其心をあらはし、下句にいふへき事をは、上句にそのつまとりをして歌はよむ事也。詩の起承<sup>キセウ</sup>転合<sup>テンカウ</sup>なといふかことし。下句にてさくらといはゝ、かみの句に、さき散<sup>チル</sup>、にはひ盛<sup>サカリ</sup>なとやうの事にておこし、下に梅さくら杯<sup>サト</sup>の

趣向シュカウを顕アラハすへきなり。大かたは其体を下句におきて、用を上句にあらはすへし。上の句に体をあらはしぬれば、未練ミレンの哥はかならず末よはになる也。たとへ哥の理は聞ゆるといふとも、かけ合あしき歌は詮なき事也。ある人の（九才）哥に、河月といふ題にて

秋の夜とたのめと月の桂川カヅラ流るゝ影カゲはよとむともなし

此哥体を上にあらはされ侍れば、下句よはき哥也。せめてよどむ瀬もなしと申たらは、哥になるべきをやと、幽齋ユウサイおほせられしなり。かやうの事一字千金チダイキンの庭訓テイキンなるへし。

#### 上下緩急クハエンキウの事

軒ノキちかみ松吹あらし鳥の声都にかはる山のおくかな

ある人此哥を烏丸家カラスケへ御らんに入しに、御批言ヒゴンに、（九ウ）哥といふもの、かくのことく手をつめたるやうにはよむべからすとて、

軒ノキちかみ松ふく嵐鳥の声と上にあらは、都にも似ぬ山のおくかなとのべたるよし。又

軒ちかみ松の嵐も鳥の音もとあらは、都にかはる山のおくかなとつめたるよしと、御加筆ありしとぞ。これ和歌第一の心得なるよし。有かたき御加筆ならずや。狂哥又おなし。

#### 風体の事（十才）

哥は五尺のあやめに水をそゝきたらんやうに、奇麗キレイにすらゝとよむへきよし、古来申はへり。わきて狂哥はいかにたくみにても、一度うちきゝて覺られぬはあしゝとするへし。

前裁センサイに翁草ヲキナクサこそ立葵タチアオイはやせとつはいひゆりたんぽゝ

斯のことく手をつめたるやうにゆるみなきはあしゝ。惣体あまりに道具をたて入んとすれば、斯のことくなるもの也。何ナンの因果インクハめぐり車のわかかゝるかたおもいめをするはものうし（十ウ）

此哥上の句、めくりくるまのわかかゝる、先ッうるさし。下、かたおもひめをするはものうし、片<sup>カタ</sup>おもひをかけたる、ことにむつかし。風体は此次にしるす皮肉骨の体を見習ふへし。

皮肉骨<sup>ヒニクコツ</sup>

皮<sup>タケタカキテ</sup> 長高体<sup>ケンヤウ</sup> 見様体<sup>ユウゲン</sup> 幽玄体<sup>ユウゲン</sup>

肉<sup>コマヤカ</sup> 濃体<sup>アルヒトフシ</sup> 有<sup>アル</sup>二<sup>ニ</sup>節<sup>ヒトフシ</sup>一<sup>一</sup>体<sup>フモノロキ</sup> 面白体<sup>フモノロキ</sup>

骨<sup>トリヒシクラニ</sup> 拉<sup>ラ</sup>鬼<sup>ラ</sup>体<sup>アルココロ</sup> 有<sup>アル</sup>心<sup>ココロ</sup>体<sup>コトヘキシカル</sup> 事<sup>コト</sup>可<sup>ヘキ</sup>然<sup>シカル</sup>体<sup>ウルハシキ</sup> 麗<sup>シヤベツ</sup>体<sup>シヤベツ</sup>

右は和歌十体をわけたり。狂哥は十体とて差別も(十一オ)なけれど、体はさまくあるへし。中にも皮肉骨はありけなり。

和歌

皮

思ひ川たえす流るゝ水の泡<sup>アハ</sup>のうたかた人にあはてきへめや  
おもふ事なととふ人のなかるらんあふけは雲に月そさやけき  
狩<sup>カリ</sup>くらし<sup>マシバ</sup>かた野<sup>マシバ</sup>の真柴折<sup>ヨド</sup>しきて淀<sup>ヨド</sup>の川瀬の月を見るかな

肉

なかめわひぬ秋より外の宿<sup>ヤド</sup>もかな野にも山にも月やすむらん(十一ウ)  
立帰り又もきて見ん松島やをしまの苦屋浪<sup>トマヤナミ</sup>にあらすな  
うかりける人をはつ瀬の山嵐<sup>ヲロシ</sup>よ烈<sup>ハケ</sup>しかれとはいのらぬ物を

骨

武士<sup>モノノツ</sup>の矢なみつくらふ小手の上にあられたばしる那須<sup>ナス</sup>のしの原

つの国の難波<sup>ナニハ</sup>の春は夢なれや芦<sup>アジ</sup>の枯葉に風わたる也

限<sup>カキリ</sup>あれはけふぬぎ捨<sup>ステ</sup>つ藤衣<sup>フチコロモ</sup>はてなきものは涙<sup>ナミダ</sup>なりけり

思<sup>イモ</sup>かね妹<sup>イモ</sup>がりゆけは冬の夜の川風さむみちとりなくなり

### 狂哥

#### 皮(十二オ)

あかづりも春は越路<sup>コシノ</sup>へ帰れかし冬こそあしのうらに住とも

酒はたゞのまねはすまの浦さひし過れはあかし浪風そたつ

すみあらず上戸の宿の板底酒<sup>イタヒサシ</sup>もりかちにふる時雨かな

千金にかへじと思春の日も一両日になりにつける哉

すゝしさを巻<sup>マキ</sup>込<sup>コン</sup>て来る文月は一葉の風のちらし書なり

### 肉

祖父<sup>ヂ</sup>は山へしばしか程に身は老てむかしくの嘶恋<sup>ハナシ</sup>しき

色につく人の心の花うるし跡はけやすきものにぞありける

ひる顔の源氏の中に見へさるははたの赤きや平家なるらん(十二ウ)

立よりてきけは鶉<sup>ウツラ</sup>のねも高し人も欲<sup>ヨク</sup>にはふけるものかは

妓王妓女<sup>ギワウギデヨ</sup>とぢたる柴のあみ戸には仏<sup>ホトケ</sup>ばかりぞおはしましける

### 骨

傘<sup>カラカサ</sup>のさしたるとがはなけれとも人にはられて雨にうたるゝ

灰吹をたゞく水鶏の音す也きせるのらうの短夜の月

あしなくてのほりかねたる筑波山連哥の道は達者なれとも

貧乏の神を入じと戸をさしてよくく見れは我身なりけり

だき付て今宵は我をしめ殺せあふにかへんといひし命そ

やり梅をこたちの椿うけとめて花の命はいけて社見れ（十三才）

老の山狩する人は見へねとも次第にしゝの落てこそゆけ

皮肉骨のうち、骨をはわきて心かけよみ習ふへきよし、京極黄門仰られしとそ。狂哥はことに骨を心かけよむへし。

さりとて骨ふとにあらくしきはあしゝ。つよきうちに艶なるかたをそふへし。風雅集の序に、艶なれはたはれやす

く、つよきはなつかしからすと侍り。いかにかしこき人なりとも、風体あしければ人のゑらひにももるゝことく、ま

して哥はうたひものにて、ふしくれたち骨あらはにあらくしきは（十三才）あしゝとそ。

#### 題とりの事

往古の狂哥は、時の興にふれていひ出せるのみにて、題とりてよむ迄の事はなし。中古雄長老、松永貞徳など、堀川百首をよみそめしより、近来はもはら題詠する事になれり。題詠は狂題もよし。されと本歌題にてよみすゆれば、狂題は自由自在なり。

#### 題よみ方心得の事

一 先題を得ては、題の心をよくくおもひとくべきなり。（十四才）古人も題を得ては仏に讃嘆するかことくすといへり。為家卿仰に、題を得ては、ひとつ橋をわたるやうに、どちへも落ぬやうをよむへしと。又仰に、哥を作には、塔をくむことく、下の句よりくみ立るやうにすへしと云云。凡題の文字の中に実字あり、虚字あり。或は題の心を一首にまはしてよむ題あり、まはしてあしき題あり。あるひは題に相応不相応なるあり。

一 八雲口伝に、題の字おほく侍れと、必しも字ことにより入まじきもあり。此題には何の字こそ詮にて（十四ウ）あるへきと見わけて可<sub>レ</sub>詠入<sub>一</sub>。字ことに捨ましきもありと云云。字ことに詠入まじきもありとは、たとへは季陽已<sub>レ</sub>闌といふ題はむつかしく聞ゆれと、暮春の心にて相叶。二星<sub>タマクアフ</sub>適逢といふ題は、七夕の年に一夜あふ心にて相叶。商律欲<sub>レ</sub>尽とあるは、暮秋の心をよめは無相違なり。文字ことに捨ましきとは、池水<sub>ナカハコホル</sub>半氷、遇不<sub>アフテル</sub>逢恋、依<sub>ヨツテ</sub>忍増恋、臨期<sub>シノブマス</sub>變<sub>レ</sub>約恋、等思<sub>ヒトシク</sub>兩人<sub>ニ</sub>恋、これらの題あまたあり。

実字は

残花何在

清輔（十五オ）

白雪にまがひし花や残れるとうはの空にも尋ゆく哉

うはの空にも何の字あり。

近萩

為氏

うたゝ寐の夜半の秋風音たてゝ枕になるゝ庭の萩はら

まくらになるゝに近の字あり。

依<sub>レ</sub>忍増恋

公経

忍はしよ石間伝ひの谷川も瀬をせくにこそ水増りけれ

瀬をせくに依の字あり。

虚字<sub>ナヨ</sub>（十五ウ）

一 虚字とは、文字は出なからすてゝ不可詠文字なり。

野外<sub>ヤグハイ</sub>霞<sub>カスミ</sub> 海辺<sub>カイヘン</sub>雪<sub>ユキ</sub> 池上<sub>チノウエ</sub>藤<sub>フジ</sub> 雲端<sub>ウンタン</sub>鴈<sub>カリ</sub>

外、辺、上、端、いづれもすてゝよまぬ也。

此外あまたあり。不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>証哥<sub>一</sub>。

難題は

ノソ<sub>レ</sub>ンテコ<sub>二</sub>ヘン<sub>ス</sub>ヤク<sub>ラ</sub>  
臨<sub>レ</sub>期<sub>ニ</sub>変<sub>レ</sub>約<sub>ニ</sub>恋<sub>ス</sub>

俊成

思ひきや榻<sub>シチ</sub>のはしかきかきつめて百夜も同じ丸寐<sub>マロネ</sub>せんとは

狂哥

橘洲

今さらに雲の下帯引しめて月の障<sub>サハリ</sub>の空ことそうき（十六オ）

ヒトシク  
等思<sub>二</sub>兩人<sub>一</sub>恋<sub>ヲ</sub>

右大臣

いつかたも夜かれん事のわりなさに二ツにわくる我身ともかな

狂哥

橘洲

わりなしや思ふふたりも須磨明石ならふ夜床を這わたる身は

チスイナカハコホル  
池水半氷

後京極

池水をいかに嵐の吹わけてこほれる程のこほらさるらん

狂哥

橘洲

われくに池の心の中われてはる氷ありうつ波もあり

僕かつたなき狂哥をそへ侍るは、おもなくはゞかり（十六ウ）おほきわさなから、此題の哥外に見及ひ侍らねは、無抛初心の見合にもと、書そへ侍るになん。

ホウタイ  
傍題の事

一 近代風体に、傍題と申事は、題のものにてはなくて、ことものをよみそふるを申なり。又哥数の有中に同事のあるをも傍題と申候。三首五首の題にはことに嫌<sub>キラフ</sub>へし。百首などの時は、雲かすみやうのものは、幾度も不<sub>レ</sub>苦と侍り。



愚問賢注に云、傍題と申事、ふるくは題の外にことものを詠加へたるなとを申たる事に候。經盛卿家の歌合（十七才）に鹿題にて

みね高く鹿のね遠くきこゆ也紅葉吹おろすよはの嵐に

清輔判に云、右紅葉吹おろすなと哥めきたり。抑傍題をはよまぬ事なりと申人もあれと、天徳の哥合にもはへるめれは、ひか事にあらしとて、持に定待ると云云。

又哥数ある中に、はしにもおくにも有題の事をよみたるをも傍題と申侍るか。三十首五十首となりぬれはさのみ申さぬ事にや。春の哥に霞の題あらんに、こと題に霞をよみ、秋に露の題の外に又露をよまん事、是をよまては（十七ウ）哥出来しかたし。又三首五首はことにはゝかるべく候。引見れば作例はありぬべく候へとも、庶幾せざる事にて候へは、たまさかの例も其詮なく候。但七夕七首なとに七夕川に天河とよみて、又こと題にて河をよまんことくるしからすと云々。

右注に傍題之事、經盛卿の哥に紅葉をよみ入たるをいふなり。か様の景物をはことにさるへき也。天徳は花山院の年号なり。此時の哥合に

朝忠

花たにもちらて別るゝ春ならはいとかくけふはおしまさまし（十八才）

是花をよみ入たるを傍題といふ也。八雲御抄に天徳寛和已後おほしとあり。暮春と花とはくるしからず。うくひす郭公なとは不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>侵<sub>オカス</sub>とあり。七首、定家卿、天川とことゝく五文字にをきてよめる也。此七夕七首は格別なり。

一 定家卿相語に云。長綱百首の内

待春月

春雨の名残の軒はかほる也月まつ里の梅の下風

是は雨後梅を詠する哥にて候。近代のはことは姿は（十八ウ）なたらかに優<sub>ユウ</sub>には候へとも、題のあるへきやうを心得

ぬ歌の聞へ候也。御心得候へし。たとへていは、主の仰らるへき用事にて、式部卿大夫左衛門尉藤内参れと仰られ候はんに、先めさぬ外記大夫右馬允めさるゝものゝくびにのりて、腋戸ワキより出て候はんは不心得候やうに、待春月に梅、雨なとかましり候事を申也。又云、外記くびにのるとは、たとへは山の題に海をよませ、花の題に帰尸出来なしたる也。朝といふ題に朝霞、朝露など引かけられん事更に（十九オ）は、かり有へからすと云々。是春月は添ソエものになりて、梅、雨か詮となりたれば傍題なり。

一 六百番哥合、秋雨

雨ふれと笠とり山の鹿の音は中くよその袖ぬらしけり

俊成卿判に云、雨ふれとゝはいへれと、袖のぬるゝもしかのねによりてそきこへ侍れば、鹿の題にてよめると見へたる也云云。

一 光明峯寺摂政家歌合

寄筵恋（十九ウ）

打かへし衣かたしくさむしろに人の心を見る夢もかな

定家卿判云、傍題の衣さしたる用なしと云云。

一 八雲口伝に云。題に出さぬものをよみ入事詮なし。連哥の傍題のことく、たゞし是は事によりて一筋に嫌きらふへきにもあらず。春の題に秋のものよみならへ、秋の題に春のものをひきくする事、さらに用なしと云云。ことによりてとあるに心をつくへし。他物を読そふる事、常の事也。しかるを題のものはかるしく、よみそへたるものゝ強ツヨクくなる故（廿オ）に傍題になれる也。鶯に梅をそへ、郭公に卯花杯そふる事、きらふへきにあらず。

片題ハタテの事

片題病とて哥の一の病也。

一 幽齋聞書に云。片題といふは、たとへは物ふたつをよみ入る哥に、ひとつをほめて一をそしるやうの事也と云云。たとへは花間鶯といふ題にて、花をほめて鶯をそしる類ひ也。花鶯ともに賞す<sup>シヤウ</sup>へし。又そしるにてはなけれど、花ばかりを賞して鶯と(廿ウ)いふ文字の入たるまてによみたるを嫌<sup>キヤウ</sup>ふ也。

昔、太田道灌<sup>ドウクハシ</sup>二人の美童<sup>ビトウ</sup>を寵愛<sup>チュウアイ</sup>ありしに、或時二人を左右にをきて一人の童を扇にてあふかれけるに、一人の少人のよめる

ともすれは思ふ方にやなひくらん扇の風も人の心も

道灌<sup>ドウクハシ</sup>見玉ひて、あしくも思よりたるかな、此かへしすへしとて、

独<sup>ヒトリ</sup>をは塵<sup>チリ</sup>をもつけしひとりをはあらし風にもあてしと思ふ

かくのことく等分<sup>トウブン</sup>によむへきなり。(廿一オ)

#### 落題<sup>ラクタイ</sup>の事

一 落題とは、題の景物をよみおとし、又眼目とよむへき文字をよみおとしたるを云也。

但、題をまはしてよみ、或は思はせて詠<sup>エイ</sup>たる詠格<sup>カク</sup>、落題にまかふもの也。よくく心得へし。

一 八雲御抄に云。経信<sup>モテアツブ</sup>、翫<sup>モテアツブ</sup>池月<sup>チキツキ</sup>といふに岩間水とよみて用池<sup>チ</sup>、俊頼は雨後野草に浅茅生<sup>アサチフ</sup>とよみて野を用ひ、野亭はすゝのしの屋といひつれはあり。山家をのきはの杉なとよめるは、其景氣を思やるなり。(廿一ウ) あなかし題をよむとはせず。これをきゝてこゝろえぬものゝ落題は一定ありぬへき事也。よくくおもひわくへしと云云。

#### 題に相応不相応之事

一 知題抄に、題を必もてなすへきとて、ふるくよりよまぬ事は心得あるへし。たとへは郭公などは山野を尋ありきて聞心をよむ。鶯などはまつこゝろはよめとも、たつねてきく心はよます。鹿のねなどは、きくにも心ほそくあはれなるよしは(廿二オ)よめとも待こゝろはいはす。かやうの事などは秀句<sup>シウク</sup>なくはさるへし。また桜を尋れとも柳を

はたつねす。初雪を待心をよみて時雨あらはまたす。花を命にかへておしむといへとも、紅葉をはさほとにおします。これらをこゝろえぬは故実<sup>コジツ</sup>をしらぬやうなれば、よくく古哥をもおもひをきて、哥のほとにしたかひてはからふべき事也云云。又花はさかりにうるはしきをもてはやすへきに、うつろひしほみたる花をよみ、春月は朧<sup>ラホロ</sup>に（廿二ウ）かすむよしあるへきをかすまぬよしをいひ、秋月はさやかなるへきをかへりて朧<sup>ケイキ</sup>なる景氣をいふなど、みな不相応なり。

題に心を深く入へき事

一 知題抄に、祝にはかきりなく久しき心をいひ、恋にはわりなく浅からぬよしをよみ、もしくはいのちにかへて花をおしみ、家路をわすれて紅葉を尋んことく、其ものに心さしを深く入てよむへしと云云。（廿三オ）

祝

君か代は千代ともさゝし天の戸や出る月日の限<sup>カキリ</sup>なければ

花

さくら花うき身にかふる例<sup>タメシ</sup>あらはいきてものをは思さらまし

紅葉

古郷にとふ人あらは紅葉ゝのちりなん後をまてと答<sup>コタエ</sup>よ

恋

いきてよもあす迄人はつらからし此夕暮をとほとへかし

一字題の事（廿三ウ）

一字題とは、雲、霞、露、月、花、雪、又郭公、紅葉なども一字題也。

京極黄門庭訓抄に、一字題をは幾度も花を下句にをくへき也。上の句に花をいひ尽しては下句に題の心よはくなる故

也。近來風體抄に云。文字もすくなくやすくとある題をは、少しやうありけによみなすへしと云々。

露といふ一字題に

清輔

竜田姫<sup>タツタヒメ</sup>かさしの玉の緒<sup>ヲ</sup>をよはみ乱<sup>ミダレ</sup>にけりと見ゆるしら露<sup>ミツ</sup>（廿四才）

此哥一字題の手本なりとぞ。

### 結題の事

結題とは、題の文字、三字、四字、五字などある也。たとへは、初春霞、雪中子曰なとやうの事也。

題をわかちよむへき事

京極黃門庭訓抄に云。二字三字より後は、題の字を甲乙にわかち置<sup>ヲク</sup>へし。結題<sup>ムスビタイ</sup>を一所におく事無下の事に侍りと云云。阿仏口伝に云。題の（廿四ウ）文字を上<sup>ウ</sup>の句にみなよみはて、下の句にいふ事のなさにすゝるなる事ともをつけたる、いと見苦しと見へ候。ある人山家卯花といふ題にて、山里の垣ほにさける卯花はとよみて、末に何と読へしともおほへられさりけるやらん、わかかへぬれる心地こそすれと読て候ける、いとおかしうて候きと云云。これにてなすらへしるへし。

### 山家卯花

跡たへてくる人もなき山里に我のみ見よとさける卯花（廿五才）

題を初五字にをくましき事

一 京極中納言相語<sup>ソウゴ</sup>に云。題は初の句斗、もしは終の句はかりにて、そのこともなきものゝ歌をおほく領する、いはれなき事也。かつは後京極殿会に、余寒といふ事を、猶さゆるとよみたる人ありき。読上しとき、五文字にて題あらはれぬ、さてありなんよますともといふ事ありきと云云。八雲口伝に、題は上の句よみ尽したる、わろし。只一句

によみたるもわろし。され共堀川院百首の題などは一字つゝにてあればさやう（廿五ウ）ならん。題数も多くよまんには、初五文字に読たらんもくるしからず。但、それも一首なとよまん題に、初五文字に詠入たらんは無下にきこゆへしと云云。

初五字に題を題したる哥

花

殷富門院太輔

花もまた別ん春は思ひ出よ咲ちるたひの心つくしを

月

太宰大式重家

月見れは思ひそあへぬ山高みいつれの年の雪にか有らん。

落花

参議雅経（廿六オ）

花さそふ余波<sup>ナコリ</sup>を雲に吹とちてしはしはにほへはるの山風

如<sup>レ</sup>斯あれはくるしからさるか。あしきといふは、

余寒

六百番哥合

猶さゆるけしきにしろし山桜また冬こもる梢なるらん

此哥、五文字に題つきたりと難あり。

題をまはす事

一 近来風体に、題の文字あらはさてよむ事、上手達者のしわざなり。初心の人不可然。近くも為明卿もよみ直して侍りきと云云。和哥用意に云。尋<sup>ナ</sup>花待<sup>ナ</sup>郭公<sup>ナ</sup>（廿六ウ）などの題にては、尋る、待といふ詞を無左右よますとも、心はふかく尋ね、あなかちに待へし。又遠し、近しなとも、詞の字以之准歟。古禅門

遠山雪

風かよふ雲も外山にしくれけりかさなるおくの嶺の白雪

又おなし題を

真観房

さらてたに跡うつむらん深山路にさこそは雪の降つもるらん

遠の字、これをもて心得へし。又恋、旅等にも結ひたらん詞の字をはかくのことく可詠歟云云。(廿七才)

一 悦目抄<sup>エツモク</sup>に云。題を心得へき様、題の文字は二字三字四字五字あり。題かならずよむへき文字、詠ましき文字、まはして心をよむへき文字、さへてよむへき文字のあるを、よくくこゝろえよむへき也。心をまはしてよむへき文字を、唯あらはに読へきをまはしてよみたるも、心くたけてわろくきこゆると師匠も、古人も申されけりと語られし。か様の事は習ひ伝ふへきことにあらず。我心得てよむへき也云云。

題をまはしたる哥(廿七ウ)

処々立春

逍遙院

誰里もけさや打とけ鳥がなくあつまより来る春のひかりに

誰里にて処々をまはしたる也。

静見<sup>ニ</sup>花

太上天皇

めかれせぬ宿の花さかり我心さへちる方そなき

めかれせぬに見る心、ちるかたそなきに静の心あり。

五月雨久

伏見院

けふ迄はさつきの日数さなからにをやまぬ雨の中に過ぬる(廿八才)

さつきの日数さなからに久心あり。

遠近秋風

兼季

吹しほり外山にひく秋風に軒はの松も声あはす也

外山に遠心、のきはに近心あり。

鹿声両方

覚延法師

宮城野の小萩か原を行ほとは鹿の音をさへわけてきく哉

鹿のねわけてきくかなに両方あり。

雪満<sup>ミツゲンサン</sup>群山<sup>ニ</sup>

雅經

つくは山は山しけ山をしなへて残るかけなくつもる雪かな（廿八ウ）

は山しけ山に群山、残る陰なくに満の字あり。

追<sup>レ</sup>日増恋

院

恋わたるけふの涙にくらふれはきのふの袖はぬれし数かは

けふの涙、きのふの袖に追日増あり。

竹有<sup>カシヨク</sup>佳色<sup>一</sup>

尊氏

百敷や生そふ竹の数ことにかはらぬ千代の色そ見へける

かはらぬ千代の色に佳の字あり。

証哥あまたあり。此類をもてしるへし。

題を思はせて詠事（廿九オ）

思はせてよむと、まはしてよむと、大かた同じ事なから、題のものをことにはに  
不出して、一首にまはして其ものよと思はする也。

一 悦目抄に云。その物のすくによまれぬには、聞しれなとよむへし。きくしれといふは、こゝをいはんとてよそを



いふ事なるへし云云。

落葉浮水

資宗

筏士よまで事とはん水上はいかはかり吹嶺のあらしそ

月照水

経信（廿九ウ）

すむ人もあるかなきかの宿ならしあしまの月のもるにまかせて

待郭公

五月雨にふり出てなけと思へともあすのあやめのねをおしむらん

此外あまたあり。

### 恋の哥の事

八雲口伝に、恋の歌にはうそ空ことおほかれと、わさともくるしからず。枕の下にうみはあれと、むねは不二袖はきよ見か関なれやとも、思ひのせつなる風情をいはんとていか程もよそへいはんに、四季の哥にはことなるへし。四季の哥には（三十オ）空ことしたるわろしとそ。庭訓には、恋の哥の題を得ては、ひとへにたゞ有心体をのみよむへしと覚へ候。此体ならてはよろしからぬ事にて候云云。又おなしく定家卿は、恋の歌よまん時は、凡骨ボンコツをはなれて、おきもせずねもせての歌にこゝろをなしてよめとをしえられしと云云。

とかく心ふかく、こまやかにやさしきか恋の本意と可申と幽斎聞書にあり。狂哥にとりても、初心のよめる恋のうたには、とかく恋の噂ウハサにて、恋にならぬかおほし。頃日ある人の哥に（三十ウ）

夜恋

春の厂も北へゆくはつ夜桜の花のすかたに床もよしはら

互思恋

余所目<sup>ヨソメ</sup>にもてふつかひよき夫婦中互にぬかす腰屏風かも

はしめのは只よし原の哥也。後のもよその夫婦中のよき噂にて、ともに恋哥にあらず。連哥はいかいには、恋の言葉のみにて恋句になり侍れと、和哥狂哥ともに恋は、いつれもおのれか恋する心ならては恋にあらず。此さかひ初心の心得違あまたあり。とかくおきもせず(三十一才)ねもせて夜をあかしては春のものとてなかめくらしつ<sup>ツ</sup>の哥に心となしてよむへき也。又ある人とふ。恋の題の哥、男か女になり、女か男になりてよめるはあしくやと。答て、女か男になり、おとこか女になりてよむ、常の事なり。いつれにも恋に切なるこゝろをよむへきなり。尤証哥に及す。

#### 寄恋の事

初心の人、寄恋<sup>ヨセ</sup>を何による恋とよむ、あしゝ。よする恋也。尤恋にかきらす。寄<sup>ヨスル</sup>月<sup>ニシユツク</sup>述<sup>ハイ</sup>懷<sup>ヨスル</sup>、寄<sup>ハナニク</sup>花<sup>ハイ</sup>懷<sup>キウ</sup>旧、いつれも同し。(三十一ウ)もと寄といふ字合点のゆかぬゆへなり。頃日初心のひとつとかく寄の字合点ゆかぬよしゆへ、古哥なとひきてきかせ侍れと猶えぬ兒なれば、ふるき童謡に見れは見わたす棹<sup>サホ</sup>さしやとゝくなせにとゝかぬ我思ひこれ寄棹恋なり。

君はさんやの三日月さまよ宵にちらりと見たはかり  
是寄月恋なりといへは、初てよするの心をえたりとてわらひ侍りき。

#### 寄風恋

宮内卿(三十二才)

きくやいかにうはの空なる風たにもまつに音する習ひありとは

#### 寄雲恋

俊成卿女

下もへに思ひきへなん煙<sup>ケフリ</sup>たにあとなき雲のはてそ悲しき

#### 草

為氏卿

かれねたゝその名もよしやしのふ草思ふにまけは人もこそしれ

ゝ木ゝ

おもひかね詠れはまた夕日さす軒端ノキハの岡オカの松もうらめし

狂哥

ゝ猿ゝ

行風（三十二ウ）

きくやいかに木の空つたふ猿たにもけかには落るならひありとは

草紙

玄康

おもひきや日向の人にあひなれて伊勢もの語きかんものとは

ゝ刀ゝ

油煙斎

腰元に手をかくるかとかの間の間もいもか心につるきたへせぬ

ゝ稲妻ゝ

朱楽菅江

しはらくも夜床に尻をすえさるは我妻ならぬいな妻そかし

述懐ゝ旧哀傷の哥の事

幽斎聞書に、述懐はおもひをのふるといふ事なれば、（三十三オ）諸道につき此心得有へし。述懐哥とて余りうらひれ、いまゝしきのみ有へからず。或は人におくれ、或は身ひとつにうれひある人の述懐などは各別の事にて候。それさへあまりなるはわろし。俊成卿述懐百首等さらに左様にも侍らす。いかにいはんや、身にとりて憂ウレひなきに、心詞とゝのをらすいまゝしきすかたなる哥は、しかるへからさる事也。述懐にとりて十体のうちをいはゝ、唯有心体にて侍るへきよし、黄門庭訓に見へたり。また哀傷のうたの事、薤露ガイロ蒿里コウリといふ事あり。則挽哥ベンカの（三十三ウ）事也（ヒツキ柩をひくうたなり）。薤露ガイロといふは、王公貴人の死去の時、野辺送りにうたふ哥なり。蒿里コウリは士大夫の野送りにうた

ふ歌也。挽哥は万葉などにもこれあり。悼<sup>イタミ</sup>の哥の事也。当座の悼の哥などは、時にのそみてともかくもあるへし。それも余りにもものかなしくもくはたて候はすとも、よき哥はさこそ候はんすらめとおほへ候と、頓阿<sup>トンア</sup>のかけるものに見へ候。ことさら追善などの哥は、跡を祝する心も侍へし。

述懐のうた

俊成

いかにせん賤<sup>ソツ、ラフ</sup>か園生のおくの竹かきこむるとも世中そかし（三十四オ）

家隆

大かたの秋の寐さめの長き夜もきみをそいのる身を思ふとて

同

和哥の浦や沖津しほ合に浮み出るあはれうき身のよるへしらせよ

為家

玉津島あはれと見すや我かたにふきたへぬへきわかのうら風

定家

苔の下に埋ぬ名をはのこすともはかなの道や敷島の哥

はしめの二首はよのつねの述懐の哥にて、（三十四ウ）さらにうらひれいまくしき体にあらず。後の三首は歌道述懐と見へたり。又

僧正遍昭

三笠山高くそのほる雲にふし嵐になれし道にまかせて

右仏法修行の事をふくめり。初心の学者は、身のうきつらきなといふ事をのみ述懐といへり。右の歌ともにて、諸道にあるものと勘弁あるへし。又懐旧といへるは、往事をしのふといふ事なり。（三十五オ）

俊成

むかしたに昔と思したらちねの猶恋しさそはかなかりける

西行

情ありし昔のみ猶しのはれてなからへまうき世にもふる哉

清輔

なからへはまた此頃やしのはれんうしと見し世そ今は恋しき

哀傷の哥

紀友則か身まかりける時よめる

つらゆき（三十五ウ）

あすしらぬ我身と思へとくれぬ間のけふは人こそ悲しかりけれ

深草のみかとの御時、蔵人頭にてよるひるなれつかふまつりけるを、リヤウアン諒闇になりにければ、さらに世にもま

しらすして、ひへの山にのほりてかしらおろしてけり。その又の年みな人御ふくぬきて、あるはかうふりた

まはりなとよろこひけるをきゝてよめる。 僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかはきたにせよ（三十六オ）

狂哥

述懷

北村季吟

よひもせぬに来れる老のみやけとてうれしうもなきシラカイタ、白髪戴く

貞徳

借錢も病もちくとあるものをものもたぬ身と誰かいふらん

四方赤良

いたつらに過る月日もおもしろし花見てはかりくらされぬ世は

橘洲

世にたつはくるしかりけり腰屏風まかりなりには折かゝめとも（三十六ウ）

懷旧

蓮生法師

いにしへの鎧にかはる紙子さへ風のいる矢はとほさゝりけり

入安

力もち荷持かち持つよかりし其こしかたになすよしもかな

鎌倉の鍛冶正宗か屋敷、今は畠となれるを見て

友信

正宗か棟門くちてさひぬるはむかしのつるき今の菜畑ナハタケ

哀傷

娘の十三回忌に

油煙齋（三十七オ）

さゝれ石の千代に八千代とそたても卒都婆ソトハに苔コケのむすめはかなや

紫笛

おもふそよあたまの鉢ヒサや膝ヒサの皿つるには野辺のやきものところ

竹杖為輕チちゝの思ひにて侍りけるとき、よみてつかはしける。

菅江

申へきことはもなしあしすたれあの世このよのふしのわかれに

祖父の墓に詣て

平秩東作

孫をかふよりのたとへもはつかしくみはかに生しゑのこ草哉

画讃歌の事クハサンウタ（三十七ウ）

画賛も題とりにおほやうかはる事なし。されと題とりよりはすこしくゆるやかなる所あり。たとへば梅に鶯のあしらひに遣水ヤリミツなとあらんに、ことくくよむは論なし。もしは梅鶯はかりよみて、やり水なとはよまてもさのみ難とすへきにもあらず。画にあるもの四色五色を、ひとつも残さてよまんとすれば、哥からくたくしくなるものなり。さりとて山にさくらあらんに、桜はかりよみて山をよまぬは落題ラクタイなるへし。

さたやすのみこのきさいの宮の五十の（三十八オ）賀たてまつりける御屏風に、さくらの花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる。

藤原興風

徒イタツラにすくる月日はおもほへて花見てくらす春そすくなき

ある所トコロの屏風の絵に、十一月神まつる家の前に馬に乗て人のゆくところを

大中能宣

柳葉の霜うちはらひかれすのみすめとそいのる神のみまへに

題とりよりゆるやかなるところ、此二首にて（三十八ウ）しるへし。

狂歌

蘭のかたかきたるに

白玉翁

山蜂のすかたを花にさき出てにほひやとをく人をおふ蘭

雪中笋かきたるに

也有

孝行は人にとられてなさけなや親にわかるゝゆきの笋

ある人我すかたをゑかゝしめて、歌をこひければ

赤良

鏡にて見しりこしなる我すかた御目にかゝるも久しふり也（三十九才）

巖<sup>イハホ</sup>にうみほうつきつけたるかたかきたるに 菅江

沖津風うみほうつきをふくからに自然とあはのなると社きけ

千なり瓢箪のかたに

橘洲

そだてからつる我まゝになりひさこ性はせんなりとは申とも

### 贈答の事

愚問賢注に、贈答の体はいかなるを本とすへきそや。あふむかへしとやいひて、心をとりなをす一体あるにや。子細八雲御抄などに見へたりといへとも、贈答体少く記し（三十九ウ）申さるへし。注贈答歌本様、八雲御抄にのせられたる、清行小町、敏行業平、後冷泉院御製大式三位等の歌、これに事つきて侍るか。鸚鵡<sup>アフラム</sup>かへしの事も、春日行幸うた出されて侍るは不可過之歟云云。

真静法師か説法をきゝて小町のもとへ 安部清行

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり

返し 小野小町

おろかなる涙そ袖に玉はなすわれはせきあへす滝津せなれは（四十才）

なり平朝臣家に侍りける女に 敏行朝臣

つれくのなかめに増る涙川袖のみぬれてあふよしもなし

といへる返事に、女にかはりて 業平朝臣



浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流るときかはたのまん

大式三位里に出侍るをきかせたまひて 冷泉院

待人はこゝろゆくとも住吉のさとにとのみは思はさらなん（四十ウ）

とある御返し 大式三位

住吉の松はまつともおもほへて君かちとせの陰そゆかしき

後一条院春日行幸に、上東門院そひてたてまつりけるを見て

法成寺入道

そのかみやいのり置けん春日野のおなし道にもたつね行かな

かへし 上東門院

くもりなき世のひかりにや春日野のおなし道にもたつねゆくらん

又さきにしるす所の様には少しかはりて、詞をかへたる（四十一オ）

あたなりと名に社たてれさくら花年にまれなる人もまちけり

といへる返事、あたなりともあたならすともいひ、またまれなるよしをいふべきを、何ともいはて返し

けふこすはあすは雪とそふりなまし消すはありとも花と見ましや

これ又ひとつの様なり。

新古今雑下、少将高光横川にのほりて、かしらおろし侍りにけるをきかせ給て（四十一ウ）

天曆御製

都より雲の八重たつおく山のよかはの水はすみよかるらん

御返し

如覚

百敷のうちのみ常に恋しくて雲の八重たつ山はすみうし

十訓抄に、成範民部卿、事ありて後めしかへされて内裏にまいりたりけるに、むかしは女房入たちにてありし人の、今はさしもなかりければ、女房の中よりむかしをおもひて

雲の上はありし昔にかはらねと見し玉たれの内やゆかしき（四十式オ）

とよみて出しけるを、返事せんとて灯爐のきはによりけるほとに、小松大臣まいりたまひければ、おそれてたちのくとて、灯爐のかけあけ木のはしにてやもじをけして、そばにぞもじはかりをかきて、みすのうちへさしいれて出られる。女房とりて見るにそ文字ひとつにて返事せられける。ありかたかりける云云。

これまことのおふむかへしなるへし。此返しを謡につくりて鸚鵡アラム小町としたるを、しらぬ人の人前（四十式ウ）にてしたりかほにかたり出たるもはかなし。雨乞の歌も小町家集には

ちはやふる神もみまさは立さはき天のとかはの樋口あけ玉へ

とあるをはいはて

ことはりや日の本なれば照もせめさりとては又天かしたとは

此うたにしたるはいかゝ。これは近代の哥也。作者はわすれたり。しかも理屈にて風流ならず。天の納受はありけめと、不庶幾哥也。

狂歌贈答（四十三オ）

貧しくて春まうくへき糧なかりけるに、よしありければ定家卿のもとへ

暁月かしはすのはての虚印地とし打こさん石ひとつたへ

返し

定家かちからの程を見せんとて石をふたつにわりてこそやれ

前関白信尋公へ淀鯉奉るとて

昌俊

折よくは申させたまへふたつもし牛の角文字たてまつる也

返し(四十三ウ)

魚の名のそれにはあらずひまのおりちとふたつ文字牛の角もし

誹諧点とりのおくに

玄札

はいかいの功なり名とけたまひなは我にもてんの道ををしへよ

かへし

貞徳

あつはれやか程功なるはいかいのてんの道には身退くなり

円融院の御とき、慈恵僧正内にまいりたまひ、女に五の障の経文いとたうとく読したまふをりから、御簾の

内よりある女房の申出されける(四十四オ)

有漏地ウロチより無漏路ムロシに通ふ釈迦シヤカたにもらごらか母は有と杜きけ

返し

僧正慈恵

いなやいなむきても見へきいが栗クリのゑめはひと度落も杜せめ

平時頼朝臣

角あれはものゝかゝりてむつかしやこゝろよ心まろくとせよ

返し

隆覚禪師

をのつから角ひとつあれ人心あまり丸きはころひ安きに

鎌倉追罰の勅をうけて出立れける時餞別に 夢窓国師(四十四ウ)

餞別に何をかなとはおもへとも本来空の一物もなし

返し

源尊氏

一物もなきをたまはる心こそ本来空の法味なりけれ

とかく返哥は、かけ哥よりひとかさかけてよむかならひなり。贈答の手本には伊勢もの語にしくものなしと師伝なり。狂哥にさきの人の名なとたち入てよむ事、常の事なから、無拠は格別、先はこのましからぬ事也。(四十五才)

禁忌をさるへき事

一 第一に公儀のさた、まして時を誹謗めきたる歌は、人の哥にても書写すましき事なり。ある人さる国君をそしる歌三四首かきうつして、ふところ紙の袋をその国にておとし、其中にかの哥ありて禁獄せられし事あり。おそるへし。よしやほむるとも、おほやけのさた、貴人高位の噂はよむましき事也。たま〜一首もよめは、それよりあらぬねしけ哥をも、かの人の作なりといひもてはやさるゝは狂哥なれば、(四十五才) かくよまぬものと、人もしるはかり、人をもいましむへき事也。惣体人をそしるは落首にて狂歌にあらず。其外喧嘩口論、人の時うしなへる事なとよむへからず。人情にあらず。

新宅には 火体 くつるゝ たふるゝ

婚姻には さる かへる もとす

追悼には しつむ うかまぬ

ある人追悼の会に雪ふりけるに、跡なき雪の庭とよみて、わらはれし事あり。(四十六才)  
年賀にこし折歌とかきたる人あり。笑ふへし。

ある人の年賀に達者をほむるとて、八十八の我<sup>が</sup>かおれたとよみて、興をさませしことありとぞ。

又会席にて老人などのあらんに聾とよみ、瞽アシナヘの前にてあしたゝぬなど、惣体あしき病体のうたなどはこゝろあるへし。只歌は和をもとゝする事なるに、人のいかりにふるゝ事よみ出るは、失礼これより甚しきはなし。応仁のむかし、逍遙院殿も乱をさけて都を出たまふとて、今川了俊のもとへ（四十六ウ）かたみよとて、定家卿御筆のいせものかたりを送たまふとて

是にたに今ははなれていせのあまの舟流したる心地こそすれ

といふ哥よみて送りたまへりしに、もと了俊の母堂は伊勢伊勢守の娘にて、その頃は尼になりてゐられけるよしあとにてきゝたまひて、おこなるあやまちしたりとて生涯後悔したまひしとぞ。行平卿はおきなさびとよみて 光孝帝の逆鱗ゲキリンにふれ、定家卿はおもひのけふりくらへと詠（四十七オ）して後鳥羽上皇の叡慮エイリョにさかひ玉ひしなど、はからさるのあやまち、あらかしめおそるへき事なり。

#### 歌の病の事

愚問賢注云。歌のやまひをさる事は、歌合にはいつれの病を近来はさるにや。四病八病をさのみさるへきにはあらず。当時きらふ病の分、しるし申さるへし。当座の哥も近来いつれのやまひをさるそや、くはしく申さるへし。（四十七ウ）注云。近来はさのみ病沙汰なく候。同心病斗をさり候。同事ふたつ候也。我宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに、無字二候。此類歟。又第三の句の終字、第四句の終字同じく候を、新撰髓腦センズイノウに嫌キラひて候。

清輔朝臣、塩竈シホカマの浦吹風にきりはれて八十島かけてのての字、此類候歟。これは間にくき文字にて候。俊成判には、平頭病もなからんよりはよろしからぬよししかゝれて候。此分は歌合の（四十八オ）さらぬ歌も同事候歟。毎月抄云。病の事平頭病はくるしからず。声韻病は必さらまほしう候。平頭病もなからんにはおとり候へく候。四病八病は人みなしれる事にて候得は、今更勘申に及はす候。天姓やまひにおかされぬほとんどの歌になり候へは、何の病もいたつら事にて候へし。さてよろしからぬ歌の、しかも病さへ候はゝ、又いたつら事にてこそ候はめと云云。

四病 喜撰式

△病也（四十八ウ）

岸樹病 カンジュ

夏<sup>△</sup>深くなりそしにけるおほあらしきの森の下草<sup>△</sup>なへて人しる

風燭病 フウショク

み山<sup>△</sup>出て夜半にやきつる郭公あかつきかけて声のきこゆる<sup>△</sup>

浪船病 ロウセン

は<sup>△</sup>なたにもち<sup>△</sup>らて別る<sup>△</sup>はる<sup>△</sup>なら<sup>△</sup>はいとかくけふはおしまさ<sup>△</sup>らまし

落花病 ラククハ

夢にたにあは<sup>△</sup>やと思ふに人恋る床にはさらにねられさりけり

七病 浜成式（四十九オ）

頭尾病 トウビ

春深<sup>△</sup>み井出の川なみ立<sup>△</sup>かへり見てこそゆかめ山ふきの花

胸尾病 ケウビ

名にしおは<sup>△</sup>秋ははつとも松むしの声は<sup>△</sup>たへせすきかんとそ思ふ

転尾病 テンビ

谷風<sup>△</sup>にとくる氷のひまことに<sup>△</sup>うち出る浪や春の初花

魔子病 エンシ

は<sup>△</sup>なたにもち<sup>△</sup>らて別る<sup>△</sup>はる<sup>△</sup>なら<sup>△</sup>はいとかくけふはおしまさ<sup>△</sup>らまし

遊風病 ユウフウ 免之。（四十九ウ）

人伝にしらせてし哉かくれぬのみこもりにのみ恋やわたらん

声韻病 セイイン 両韻てにをは不免。かくのことは免之。

あし曳の山隠れなるさくらはなちり残れりと風にしらすな

遍身病 ヘンシン

常夏のにほへるには、からくに、おれる錦もしかしと思ふ

八病 喜撰式

同心病

我宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

乱思病 ランシ (五十才)

こひしさはおなし心にあらすともこよひの月を君見さらめや

欄蝶病 ランテウ

なつの日のくれをもしらすなく蟬はとひもしてしかなに事かうき

渚鴻病 シヨコウ 歌にあしき趣也

暮の冬我身老行苺のはふ枝にそおふれうれしけもなく

花橘病 クハキツ

冬来れは梅に雪こそふりかくれいつれの枝を花とはおらん

老楓病 ラウフウ

一首の中不籠思詠也。上四下三の句也。(五十ウ)

中飽病 ホウ

無用の字あまり也。無用ならぬはくるしからず。

後悔病コウクハヤイ

速口ハヤクチによむを詮にし、後によみ直しなとせんとおもふ後悔あり。

狂哥には、同心病、声韻病の外は、平頭病、歌合などにはきらふへきにこそ。

字余りの事

近代風体云。三十一字よりあます事は、秀逸の事は（五十一オ）子細なし。さなくては無用の事なりと云云。

作例

年ふれはよはひは老ぬしかはあれと花をし見れはもの思ひもなし

かくのとき秀逸は論なし。初心の人、たけをこのみてよしなき事をあますあり。これ中飽病ホウなり。

有磯海アリソウウミの波間かきわけてかつくあまのいきもつきあへす物を社おもへ

これは三十六字あり。

限あれはあけなんとする鐘の音に猶なかき夜の月そのこれる

これは三十三字あり。（五十一ウ）

又俊成卿述懷百首春歌に

去年もさてくれにきと思へは春来ぬといふよりやかてものそ悲しき

これはくれぬとおもへはにては気味不宜よしなり。狂歌には初心ならぬ人も中飽病あまたあり。されと東都の哥にはすくなし。難波の哥にあまた見ゆ。国風にはあしからぬなるへし。

歌の程拍子の事

幽斎聞書に、歌の程拍子といふ事は、歌は音律オンリツにかけて披搆ヒカウするもの也。しからはなとか程拍子なからん。（五十二



オ)よの常の人の言語も、ことはりはありといへとも、ほと拍子わろければことはりきこへす。かりそめの文章などもかくのことし。先歌に三十一字を用る事も、ほと拍子によりての事なる歟。旋頭歌セントウ、混本歌コンホンなどといふ事も、もとは三十一字に一句をあまし、或は一句不足ある歌なり。是を今の世にはやりもて遊はぬ事も、三十一字の哥には程拍子をとるゆへ也。字あまりの哥も程拍子をよくうけんか為なり。大江千里の歌に(五十二ウ)

月見れはちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

此歌下の句、秋ならねともとあるへきを、秋にはあらねとゝ一字あませる所に歌の程拍子あるへき歟。一字千金とは、か様の事なるへし。

#### 秀句の事

京極黄門庭訓に、大かた哥にうけられぬものは秀句にて候。秀句にも(俗にいふいひかけなり)自然に何となく詠出せるはさてもありぬへし。いかゝせんととりくたしなみよめる、きはめて見るしく見さめする(五十三オ)事に待るへし。行平のたちわかれの哥は、ことに秀句すきたり。しかれとも結句にていひことしたる、尤めてたきと俊成卿申されたりとぞ。とかく秀句はうけられぬものと心得へし。

から衣きつゝなれにしつましあれば、此歌只の歌ならは秀句すきたり。これは折句なれば申分なし。ふたかたにいひもてゆけは玉くしけ我身はなれぬかけこなりけり、よくも玉くしけにまつはれたる哉。卅一字の中に、こと文字はすくなくそへたる事の(五十三ウ)かたきなりと、しのひてわらひたまふ。已上幽斎聞書

狂歌不案内の人は、秀句ならねは狂歌にあらずと思へる人多し。とかく狂哥も秀句もてつゝけたるは、弱ヨバくて見所なし。前に出せる、酒はたゝのまねは須磨の浦さひしなとは格別也。頃日東都の風は秀句をこのます。ひたすらに骨をこゝろかくれば、又余所ヨソの国にては東都の哥ふときにすきて無骨フゴツなりとさたするもあるへし。

#### 隔句の事(五十四オ)

哥をよむに、ことはりのあまりていひのへられぬところへ、耳にたゝぬ枕ことはにても、よのつねの詞にても、一句いれて下へいひくたしてよむなり。

梅か枝にきゐる鶯春かけてなけともいまた雪は降つゝ

右、うくひすのなけともとつゝきはへるへきを、さやうにては歌にならざるあいた、春かけてといふ句を隔句にいろゝ也。

思ふとち春の山へに打われてそこもしろぬ旅寐してしか

右、うちむれて、隔句なり。(五十四ウ)

たらちねはかゝれとてしもむは玉の我黒かみをなてすやありけん

これもむは玉のといひのへたる隔句なり。か様の事はしれはやすく、しらねは歌ことに不審ある事あり。勘弁すへし。無名抄に、俊恵もの語の次に問て云。遍昭哥たらちねはかゝれとてしも、此歌の中にはいつれの事かすぐれたると、おほすらんまゝにのへたまへといふ。かゝれとてしもうは玉のとやすめたる詞の程こそはことにめてたけれといふ。

かくなりゝはや哥は境に入れにけり。(五十五オ) それにとりて日といはんとはあし曳といふは常の事なり。されとはしめの五文字にてはさせる境なし。こしの句よくつゝけて詞のやすめにをきたるは、いみしう哥の品もふるまへる氣つらひともなる也。古人これを半臂ハンビの句よとそいひ侍る。はんひはさせる用なきものなれと、襷束のかさりとなるものなり。哥三十一字、いくほともなき中に思ふ事いひきはめんに、むなしき詞をは一文字なりともそゆへくもあらねと、此半臂ハンビの句かならずしなもなくてすかたを飾カサル(五十五ウ)ものなり。すかたに花麗クハレイきはまりぬれは、をつから余情となる。半臂ハンビの句もせんは次の事ぞ。眼にはたゝとてしもといふ四字なり。かくいはんは半臂ハンビのせんならましとこそ見へ侍れとなん。

狂歌にも、互思恋タカイニフの哥に

荷<sup>ニナ</sup>ふたら棒<sup>ボウ</sup>も中からほつきりとをれとそなたの恋の重荷は

此ほつきり半臂<sup>ヒタマエ</sup>の句にて、凡慮の及ぬところなり。坂田藤十良といへる名たゝる俳優<sup>俳優</sup>のかたりしよし、ある人のかたりしは、藤十良はしかゝりより首を（五十六オ）投<sup>ナゲ</sup>る時、舞台の役者ぬきうちにはたとき狂言のならしに、彼役者たひく切はつしければ、藤十良いろく案<sup>ト</sup>して与<sup>ト</sup>風瓦師<sup>フカハラシ</sup>の瓦をなけてうけとるさまをおもひ出で、初日に投<sup>ナゲ</sup>ければかのやくしや見ことに切たるとき、諸見物かのきりたる役しや斗をどつとほめて犬骨折たりと笑ひしとそ。是をおもふに、此藤十良狂言の半臂也。初心の歌はとかく右のきる所斗を心にいれて、投<sup>ナゲ</sup>る所に心をいれねは、たまくはたとき程の妙句ありても（五十六ウ）見物の目にとまらず。歌はとかく藤十良を工夫すへき事なり。第三の句はかりにもかきらず。一首のうちいつれにても此工夫第一なり。

#### 歌合のうたの事

八雲口伝に、歌合の哥はことに失錯なく、人の難しつへからん事をかねてよくく見るへし。たけもあり、物にもうつましきすがたを詠へし。これをはれの歌とも申へし。近代風体<sup>フキヤウ</sup>に、げんじ狭衣などの歌をば哥合などとなゆへからすと。（五十七オ）

狂哥には何にてもくるしからず。

又云。歌合には、月の題に有明、花に落花よむへからすと。常の歌にもこれはよむ事いかゝ。

又云。歌のやまひは同心病と、第三四の終字おなしきとをきらふへし。其外は細くの哥にはくるしからざるよし頓阿申き。但歌合には猶先達きらひたる病とも侍るにや。同心病の例。

あま小船いまそ渚<sup>ササ</sup>にきよすなる汀<sup>ミナト</sup>のたつも声さはく也

大空<sup>オホソラ</sup>にちきる思の年もへぬ月日もうけよ行末の空（五十七ウ）

三四の終字可嫌作例

しほかまの浦吹風に霧はれて八十島かけてさゆる月影

か様のやまひ歌合には嫌ふへしとそ。後鳥羽院御抄に、哥合の歌はいたくおもふまゝには不<sub>レ</sub>詠と、尺阿寂蓮など申侍りし云云。

狂哥も歌合には、同心、声韻、平頭病はきらふなり。此うち平頭病は常の歌には本歌さへさりあへぬ事のよし也。

歌に必切所ある事（五十八才）

歌にかならずきるゝ所一ところあるへし。二所にてきるゝはあしゝ。

第一の句にて切たる歌

消<sup>キエ</sup>わひぬ移<sup>ウツロ</sup>ふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露

第二の句にてきれたる

夢にても見ゆらんものを歎<sup>ナゲキ</sup>つゝ打ぬるよひの袖のけしきは

第三の句にて切たる

忘<sup>ワスレ</sup>ては打なけかるゝ夕かな。我のみしりてすくる月日を

第四句にて切たる（五十八ウ）

あたにちる露の枕に伏わひて鶺<sup>ウツラ</sup>なくなる床の山かせ

第五句にて切たる

せきかぬる涙の川の早き瀬はあふより外のしからみそなき。

切字手<sub>ル</sub>於葉は後卷にしるす。

名所の哥の事

八雲口伝云。名所をよむ事、常にきゝなれたる所をよむへし。但其所にのそみてよめらんには、耳とをからんもくる

しかるまし。又云。其所の当坐の会席などは、只今の景望ありさまを詠へし。たとひ秀（五十九才）歌なりとも、義  
たかひぬれは無正体なり。さかぬ山にも花をさかせ、紅葉せぬ所も紅葉せせん事は、只今其所にのそみ歴覽レキランせんに  
は、花も紅葉もあらは景氣ケイキにしたかひて詠すへし。さらては古事をいくたびも案しつゝくへきとなり。大淀ヨトの浦にも  
今は松なし。されと猶いひふるしたる筋を詠すへし。なからの橋なとたへましかはことふりたる、水無瀬川には水あ  
れとも水なしと詠すへきなり。かくはおもへとも、いまもめつらしきことも出来てむかしの跡かはりて、（五十九ウ）  
ひとふしも此次によむへからんには、さまにしたかひてかならずよむへし。ひとつも出たる歌は作者一人のものにて、  
撰集などにも入なりと云云。愚問賢注に、名所の景物は月雪などいふものはいづくにもあるへければ、作例なくとも  
よまん事くるしみあるへからざるをや。されと月は更科などよみ、雪は伏見ふか草などをよめるは、たよりありて聞  
よきにや。花、郭公などは、作例なき名所にはよむましきやらん。其所にのそみては子細なしといへとも、左右なく  
よむ（六十才）ましきもの、いつくにわたりてよむへきもの、おほつかなし。雲かすみなどいへるは所さたむへから  
すといへとも、猶証哥のよりところあるをよむへき歟、又いつくをよみたらんも子細あるへからざるか、細コマカにしるし  
申さるへし。注。月雪雲霞などはいづくにもあるものなれとも、よみつけたる所を詠すへきよし、先達申さるゝか。  
およそかく心得ぬる上に、たよりあるやうにとりなし候ひぬれはくるしからず候か。里に擣衣ドウイとよみ、河に蚩チなどを  
よみ候（六十ウ）こと、作例をもとむるに不及候か。草木などの名をさしたるは、はしめてよみかたく候。但衣笠中

#### 納言

白露の手枕の野のをみなへし誰とかはせるけさの余波ナヨリそ

といふ歌は証哥を尋るに及す、殊勝なるよし時の歌仙さたし候けるとうけたまはり置候。

狂歌尤此こゝろえ専一なり。本歌によみ残せし名所メイショ、狂哥のよみものなり。されとあまりに野鄙ヤビなる名をは用捨ある  
へき歟。

あまのはし立犬の堂にて（六十一止オ）

幽斎

はるくと犬の堂よりなかわれは霞はふねの帆へかゝりけり

紅葉の哥に

貞柳

駕<sup>カゴチン</sup>賃をとられて行し山くはあたこ<sup>タカラ</sup>高雄の紅葉見の頃

されと題とりに耳遠き名所は、証哥ありとも詠へからず。

江戸本町筋通油町南側

蔦屋重三郎板

（六十一止ウ）